

 浄土真宗について

ご 本 尊 <small>ほん ぞん</small>	阿弥陀如来 <small>あ み だ に ぼ り</small>
正依の經典 <small>しょうえ きょうてん</small>	仏説無量寿經 <small>ぶつ せつ む りょうじゆきやう</small> 仏説観無量寿經 <small>ぶつ せつ かん む りょうじゆきやう</small> 仏説阿弥陀經 <small>ぶつ せつ あ み だ きやう</small>
宗 祖 <small>しゅう そ</small>	親鸞聖人 <small>しん らんしやうにん</small>
宗祖の主著 <small>しゅう ちよ</small>	顕浄土真実教行証文類 <small>けんじやうど しんじつきやうぎやうしやうもんるい</small> (教行信証) <small>きやうぎやうしんしやう</small>
宗 派 名 <small>しゅう は めい</small>	真宗大谷派 <small>しんしゅうおおたに は</small>
本 山 <small>ほん ざん</small>	真宗本廟 (東本願寺) <small>しんしゅうほんびやう ひがしほん がん じ</small>

《  のご案内》

南御堂オンラインでは、法話やコラム等の充実したコンテンツが目白押しです。是非ご活用ください。

<https://www.minamimido.online>



弥陀大悲の誓願を
みだ せいがん

ふかく信ぜんひと はみな

ねてもさめてもへだてなく

南無阿弥陀仏をとなうべし
なむあみだぶつ

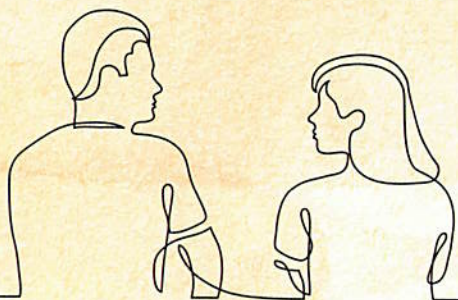
(親鸞聖人「正像末和讃」／『真宗聖典』505頁)

《現代語訳》

阿弥陀仏の大きいなる慈悲の誓願を深く信じる身となつた人は、寝ているときも起きているときも変わりなく、南無阿弥陀仏となえるのがよい。

先達とともに
せん だつ

法事のあり方



先達^{せんだつ}とともに 法事のあり方

法事の後に、よく施主さまより「これで親もよろこんでいます」と言われます。この言葉について考えてみたいとおもいます。

法事は、法要^{かなめ}とも言い、「法が要」の儀式です。法とは仏法のことです。つまりこの法要・法事をご縁として、亡き親・亡き人（先達^{せんだつ}）から参列者全員に「阿弥陀さまの教え（法）に寄り添って人生を歩んで欲しい」と願われているのです。それに応えることがお念仏という「法の仕事」です。故人を偲んで、僧侶がお勤めをし、皆でお斎（食事会）をされるのが大事にされがちです。もちろんそれらも大切です。しかし法要とは、それだけではなく、生きている皆さんのためにあるのです。よって私は平素、法事の席で、「まず合掌してお念仏を称えましょう」とお声がけをし、お経さまを勤めます。

さて、真宗の仏道とは、在家の方々を中心とした「人生の歩み方」です。世俗を離れた修行や苦行を強いるものではありません。宗祖・親鸞聖人の教えが記された『歎異抄』に、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」とありますが、これは聖人が師・法然上人より手渡された念仏道です。修行も苦行もかなわない私どもに残された、内面からの「目覚め」に導く唯一の仏道なのです。この教えに出会われることこそ、「真^{まこと}の先達のよろこび」ではないでしょうか。日頃より、私たちはあらゆることに右往左往して、ものの見方が定まりません。そんな私たちでも安らぎの大地に着地できるのがお念仏なのです。念仏とは、「老若男女を問わず、生きとし生けるものを救いたい」という私たちへの呼びかけ、阿弥陀さまからのお約束です。

現代社会では、声高らかにお念仏申す機会も減りました。お寺の伽藍か、お内仏の前に限られてしまっているかもしれません。だから、せめて法事には先達とともに、お念仏申しあげたいものです。

